

地域の人たちと共に

川口小学校 六年 北村 博志

震災から一年。ぼくは確実に地域の人たちと仲良くなっているように感じます。あいさつをする機会が多くなりました。地域の人たちといっしょに生活したことで、より親しくなったのかもしれない。

実際に、昨年十月二十三日の午後五時五十六分まで、地域の人とは他人だと思っていました。しかし、共に過ごす中で、地域の人いろいろな面を見つけることができました。

避難所の生活の中にはいろいろな役割がありました。大人が分担してくれました。水くみに行くと、必ず地域の人が「ありがとう。」

と言ってくれました。ちょっとしたことだけれどすごくうれしい気持ちになりました。役割を果たしながら生活することで、協力することの大切さを学びました。

避難所のテントでは、地域の人とトランプなどをして、よりいっそう仲良くなりました。時間があるときは、自分から「トランプでもしませんか。」

と言えるようになりました。そんなことから親しさが生まれていったのかもしれない。

避難所生活をしていない今、地域の人と協力して何かをするということは少なくなりました。ふと、地域の人やまた「他人」になっってしまったのでしょうか。ぼくはそうではないと思います。震災前は、地域の人にあいさつすらできませんでした。今、毎日のあいさつができるようになったからです。

ぼくは震災前まで『親しくなる』の意味を深く考えることがありませんでした。この一年の経験から、『親しくなること』は心のふれあいだと感じています。ただ生活しているだけでは親しくなれないということですね。ひとつの意思があれば、そこに親しみがわいてくるのだと思います。避難所でみんなが

「早くもとの生活に戻りたい」

という意思があったからこそ、親しくなれたのだと思います。

震災で大変な思いをした人、している人はたくさんいます。みんな意思をもって、がんばっていきましょうとすれば、親しみがわいてきて大きな力になります。家族だけではなく地域の人たちとも協力しながら、町の復興に向かっていきたいと思っています。